

二十二願事ノート

山上正尊
20240513 真宗寺寛々イン講座会読
20240731 本山安居

二十二願事 判決 2024	1
会読案 出拠	4
類文	4
釈名	5
義相① 『大経 第二十二願の願意	5
義相② 『論註の釈意	8
②の1 不虛作住持功德	8
②の2 『論註 三願的証の釈意	8
義相③ 『教行信証「証文類の引意	9
③の1 科段	9
③の2 正釋	10
義相④ 宗祖の還相回向釋の特色	12
順縁の教化 化身土文類	14
逆縁の教化	14

判者 北塔和上 典義 天岸和上

【題意】

『大経』の第二十二願は「必至補処の願」「一生補処の願」等と称されてきた。この十二願を曇鸞大師が『往生論註』に引用された意趣を窺い、宗祖が『教行信証』『証文類』において二十二願を還相回向の願と名づけられた独自の釈意を明らかにする。

【出拠】

『大経』第二十二願、『同』成就文。

『往生論註』『不虛作住持功德釈』の釈文、および「覈求其本釈」の三願的証の文。

『教行信証』『証文類』『還相釈』。

『三経往生文類』『如来二種回向文』など。

【釈名】

二十二願事とは、『大経』に説かれた法蔵菩薩の四十八願中の第二十二願所誓の願事を指す。その内容は、「必至補処の願」「一生補処の願」「還相回向の願」（『聖典全書』二・一三七）「大慈大悲の願」（『聖典全書』二・五八四上）等の願名から窺うことができる。

このなか「必至補処の願」「一生補処の願」は願文当分の願名で、安樂浄土へ来生した菩薩は、因人の究竟位である一生補処に至らしめると誓われたことにより名づけられたものである。これに対して「還相回向の願」「大慈大悲の願」は宗祖独自の願名で、「還相回向の願」とは阿弥陀仏が衆生に還相を回向されることを誓われたと見られたものであり、「大慈大悲の願」とは願文の「普賢の徳」の語から還相回向の内容として名づけられたものである。

ただし「必至補処の願」「還相回向の願」と二方向の願名があるといっても、第二十二願に二種の願事が誓われているとは言えない。

伝統的に「必至補処の願」と名づけたときは、一生補処の菩薩に至らしめることが願事であり、「除其本願」以下はあくまで除外例となるため一願事である。また宗祖が「還相回向の願」と名づけられたときは、「一生補処」は従果還因の菩薩の本国位相を意味し、「除其本願」以下はその他方摂化を意味して共に従果還因の相となり、第二十二願全体が一つの還相回向の願となるため、一願一願事の常格をまもることになる。

【義相】

一、『大経』 二十二願の願意

『大経』の第二十二願は当分の訓点で読めば、

設我得仏、他方仏土 諸菩薩衆、来生我国、究竟必至 一生補処。
除其本願、自在所化、為衆生故、被弘誓鎧、積累徳本、度脱一切、
遊諸仏国、修菩薩行、供養十方 諸仏如来、開化恒沙 無量衆生、
使立無上 正真之道、超出常倫 諸地之行、現前修習 普賢之徳。
若不爾者、不取正覚。

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土の諸の菩薩衆、わが国に來生して、究竟してかならず一生補処に至らむ。その本願ありて、自在に化する所、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如來を供養したてまつり、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめ、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習するを除く。もししからずは、正覺を取らじ。

〔聖典全書〕一・二六

となる。『梵本』の第二十一願、『如來會』の第二十二願も同意である。

その内容は、他方仏土の菩薩が安樂淨土に來生すれば一生補処に至らしめると誓われたものとなっている。ただ「除其本願」以下「普賢之徳」の文は除外例を示し、來生の菩薩が自らの本願によって他方国土にて利他教化をせんとするならば、「常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習する」と、來生の菩薩の利他の願意を重んじ、本国に限定せず究竟の利他行を行ぜしめると願ぜられたものと読める。

そのことは『大經』第二十二願、同じく成就文、『如來會』の第二十二願、同じく成就文、『梵本』等によって明らかである。

一、『論註』「不虛作住持功德積」の積意、「三願的証」の引意

『論註』下巻の「不虛作住持功德積」より『淨土論』の、

すなはちかの仏を見たてまつれば、未証淨心の菩薩畢竟じて平等法身を証することを得て、淨心の菩薩と上地のもろもろの菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得るがゆゑなり。

〔聖典全書〕一・五一〇

の文に対する積を見ると、「畢竟等」を一往の義とし、「即等」を再往の義とされる意が窺える。その根拠として用いられたのが第二十二願であり、このときは「恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめむ」（『聖典全書』一・五一二）までを除外例とされ、以下を「常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せむ」（『聖典全書』一・五一二）の意と読まれ、速やかに一生補処に至る根拠として、

この経を案じてかの国の菩薩を推するに、あるいは一地より一地に至らざるべし。十地の階次といふは、これ釈迦如來の閻浮提における一の応化道なるのみ。

〔聖典全書〕一・五一二

と、「即等」は如來の不虛作住持功德力たる本願力に依る故と見られたと窺える。

また『論註』下巻の「覈求其本積」では、『大經』の第十八願、第十一願、第二十二願をもって速得菩提の証とされている。まず、第十八願力によって往生し、第十一願力によって彼の土において正定聚に住し、第二十二願力によって常倫諸地の行に超出し、普賢の徳たる一生補処に至らしめるとされている。このように曇鸞大師は第二十二願の「除其本願」より「無上正眞之道」までを除外例とし、「超出常倫諸地」以下を、「即等」または「速得菩提」の文証と見られていたことが領解される。

一、宗祖の二十二願積の特色

宗祖は「証文類」「還相釈」で、『論註』不虛作住持功德積中の第二十二願文に対して、

たとひわれ仏を得たらむに、他方仏土の諸の菩薩衆、わが国に來生して、究竟してかならず一生補処に至らむ。その本願の自在の所化、（中略）恒沙無量の衆生を開化して無上正眞

の道を立せしめむをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せむ。もししからずは、正覚を取らし。

（『聖典全書』 二・一三九）

と、訓点を施しておられる。

『論註』の釈文を承けられているが、往生即成仏義を立てられる宗祖は、「超出常倫諸地之行、現前修習普賢之徳」の文を『大経』当分とも『論註』の意趣とも異なつて、「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せむ」と読まれている。「行文類」「他力釈」の第二十二願も、その他の文もほぼ同意の訓点である。この訓点によつて「究竟必至一生補処」の本国位相も「除其本願自在所化」以下の他方摂化も、共に従果還因の相と見られたことが窺える。すなわち宗祖は、「本国位相」も「他方摂化」も極果を極めた者の従果還因の相であつて、本国にあつては広門示現して一生補処の菩薩相を示して仏国土を莊嚴し、他方国土においては仏、菩薩、天、人等のあらゆる姿を自在に現じ、いかなる機縁にも応じて無碍の教化を施すことをあらわす「普門示現」の徳が恵まれると見られた。そしてこれらを総じて、大慈大悲の至極をあらわす「普賢の徳を修習せむ」の願文より、第二十二願に「還相回向の願」「大慈大悲の願」と独自の願名を立てられたのである。

特に願文の「普賢の徳」の語を用いられた「讃阿弥陀仏偈和讃」（国宝本）には、

安樂無量の大菩薩は 一生補処にいたるなり

普賢の徳に歸してこそ 穢国にかならず化するなれ

（『聖典全書』二・三四三中）

の「普賢の徳」の御左訓に「われら衆生極樂にまいりなば大慈大悲をおこして十方に至りて衆生を利益するなり 仏の至極の慈悲を普賢と申すなり」と記されており、還相とは往生を遂げた者が恵まれる至極の慈悲を行ずることと領解されていたことが知られる。

『大経』

(『聖典全書』一巻26頁) 当面の読み方

(梯實圓和上『教行信証の宗教構造』384頁) 当面の読み方

たとひわれ仏を得たらんに、

他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らしめん。

その本願ありて、自在に化せんとする所の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめ、常倫に超出して諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんものを除く。若ししからずは、正覚を取らじ。

『論註』下

(『聖典全書』一巻 觀察体相章 衆生世間 仏 不虛作住持功德 51頁、三願的証528頁)

(『註釈版』七祖篇134頁、156頁)

設ひ我仏を得むに、

他方仏土の諸の菩薩衆、我が国に來生せば、究竟して必ず一生補処に至らむ。

其の本願の自在に化せむとする所ありて、衆生の為の故に、

弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめむをば除く。

常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せむ。

若ししからずは正覚を取らじ。

「証文類」(『註釈版』316頁)

〈たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して究竟じてかならず一生補処に至らん。

その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめんをば除く。

常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。

もししからずは正覚を取らじ〉

類文

『略典』(『聖典全書』二巻265頁)(『註釈版』482頁)

【14】 二つに還相回向といふは、すなはち利他教化地の益なり。すなはちこれ必

至補処の願（第二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づけ、また還相回向の願と名づくべし。

『浄土三経往生文類』（『聖典全書』二卷584頁）（『註釈版』629頁）

【7】「一つに還相の回向といふは、『浄土論』にいはく、「本願力の回向をもつてのゆゑに、これを出第五門と名づく」といへり。これは還相の回向なり。一生補処の悲願（第二十二願）にあらはれたり。

大慈大悲の願（第二十二願）、『大経』（上）にのたまはく、「たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生すれば、究竟してかならず一生補処に至る。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除かんと。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは、正覚を取らじ」と。「文」この悲願は、如来の還相回向の御ちかひなり。

『如来二種廻向文』（『聖典全書』二卷725頁）

釈名

二十二 法蔵菩薩所誓の第二十二願
願事 願いのこと。内容。

義相① 『大経』第二十二願の願意

『大経』（梯實圓和上『教行信証の宗教構造』384頁）当面の読み方

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らしめん。

その本願ありて、自在に化せんとする所の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめ、常倫に超出して諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんものを除く。
若ししからずは、正覚を取らじ。

『如来会』（『聖典全書』一卷303頁）

（一一一）

若し我成佛せむに、彼の國中に於ける所有る菩薩、大菩提に於て、咸悉く位階一生補處ならむ。

唯大願ある諸菩薩等、諸の衆生の爲に、精進の甲よろひを被り、勤めて利益を行じ、大涅槃を修して、諸佛國に遍して菩薩の行を行じ、一切の諸佛如來を供養して、洹沙の衆生を安立し無上覺に住せしめ、修する所の諸行、復た（於）前に勝れ、普賢の道を行じて（而）出離を得むおば除く。
若不爾者、不取菩提。

（藤田宏達『梵本和訳 無量寿經・阿弥陀經』79頁）
（二一）

もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、かしこの仏国土に生まれた者となるであろう衆生たちが、

―― 大いなる鎧を身にまとい、一切の世間（の人々）の利益のために〔鎧を〕身にまとい、一切の世間の利益のために専心し、一切の世間を般涅槃せしめるために専心し、一切の世界において菩薩の行を実践しようと欲し、一切の仏たちを尊崇しようと欲し、ガンジス河の砂に等しい衆生たちを無上なる正等覺に安立させ、さらにその上の行に向かい、サマンタバドラ（普賢）の行に決定しているこれら菩薩・大士たちの、特別な諸誓願〔がある場合〕を除いて――

すべて、無上なる正等覺に向けて、一生だけ「ここに」つながれた者（一生所繫）とならないようであるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません。

Q 文意如何

A （梯實圓和上『教行信証の宗教構造』385頁）

他方仏國の菩薩達が安樂國に生まれてきたならば、必ず菩薩の最高位である一生補処の位に至らせよう。

ただし、その菩薩が、浄土に生まれてくる前に、次のような願いをもっているものは、その限りではない。すなわち浄土に生まれたならば、衆生を自在に救うことのできる身になろうという決意に身を固めて、多くの善行を積み、すべてのものを救おうと願い、そのために、諸仏の国々へ行ってあらゆる如來を供養し、無量の衆生を救うて悟りを得しめるという自利利他の実践を行おう。それについて菩薩の通常の階位を超え、その場で普賢菩薩がなされるような大悲の行を実践したい。このような願いを持っているものはその通りにしてあげようと誓われたものである。

Q 願事如何。

A 往生した者を一生補処に至らしめること

Q 穢土に還って衆生救済することは願事ではないのか。

A 阿弥陀仏の願事ではない。願生の菩薩が願ったことで、それを阿弥陀仏が許可されているだけである。

sacen me bhagavan bodhiprāptasya tatra buddhaksetre ye sattavāḥ pratyājātā
 もしも わたくしが 世尊よ 覺りを得たときに かしこの 仏国土に 衆生たちが 生まれた者と
 bhaveyus te sarve naikajātipratibaddhāḥ syur anuttarāyām samyaksambodhau
 なるであろう すべて 一生だけ〔ここに〕つながれた者とならないようであるならば 無上なる 正等覺に向けて

sthāpayitvā pranidhānaviśesāms tesām eva bodhisattvānām mahāsattvānām
 を除いて 特別な諸誓願〔がある場合〕を これら 菩薩 大士たちの
 mahāsamnāhasamnaddhānām sarvalokārthasamnaddhānām sarvalokārthābhiyuktānām
 大いなる鎧を身にまとい 一切の世間〔の人々〕の利益のために〔鎧を〕身にまとい 一切の世間の利益のために専心し
 sarvalokaparinirvāpitābhiyuktānām sarvalokadhātuṣu bodhisattvacaryām caritukāmānām
 一切の世間を般涅槃せしめるために専心し 一切の世界において 菩薩の行を 実践しよう欲し
 sarvabuddhān satkartukāmānām gaṅgānadīvālukāsamān sattvān anuttarāyām
 一切の仏たちを 尊崇しよう欲し ガンジス河の砂に等しい 衆生たちを 無上なる
 samyaksambodhau pratiṣṭhāpakānām bhūyaś cottaricaryābhimukhānām
 正等覺に 安立させ さらにその上の行に向かい
 samantabhadracaryāniyatānām
 サマンタパトラ（普賢）の行に決定している

mā tāvad aham anuttarām samyaksambodhim abhisambudhyeyam
 ません その限り わたくしは 無上なる 正等覺を さとり

◆サンスクリットには3つの性〔男性、中性、女性〕、 3つの数〔単数、両数、複数〕、
 8つの格〔主格、対格、具格、為格、従格、属格、処格、呼格〕がある。

◆「文字圏の語」はすべて男性・複数・属格のかたちであり、「tesām eva bodhisattvānām mahāsattvānām」の説
 明であることが分かる。

◆したがって、「除」の範囲が「samantabhadracaryāniyatānām」までであることがわかる。
 サマンタパトラ（普賢）の行に決定している

義相② 『論註』の釈意

②の1 不虛作住持功德

Q 不虛作住持功德とは『浄土論』のどの言葉の釋か？

A 「觀仏本願力 遇無空過者 能令速滿足 功德大宝海」(『聖典全書』一卷509頁) 本願力によって速やかに功德を満足するはたらきを指す。

Q 具体的には誰が功德を満足されるのか？

A 未証淨心の菩薩が淨心上地の菩薩と等しく寂滅平等法身を証得する

【90】

すなはちかの仏を見たてまつれば、未証淨心の菩薩畢竟じて平等法身を証得することを得て、淨心の菩薩と上地のもろもろの菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得るがゆゑなり。(510)

未証淨心の菩薩 初地以上七地以還のもろもろの菩薩

淨心上地の菩薩 八地以上の法性生身の菩薩

Q 七地と八地の違いは？

A 八地は七地沈空の難を超えている。

Q 七地沈空の難とは

A 仏道を捨てた状態。七地において自身が寂滅を得るので、上は求めるべき仏もない、下は度すべき衆生もない。

(『聖典全書』一卷511頁)(『註釈版』七祖篇133頁)

菩薩、七地のうちにおいて大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず。仏道を捨てて實際を証せんと欲す。

Q 第二十二願の引意如何

A 浄土に往生すれば、修行の階梯を一つずつ経ていくという常倫を超出して、速やかに寂滅平等を得ることができるのは本願力によることの証明に第二十二願を引用する。

Q 「畢竟じて同じく寂滅平等を得る」なら、少しずつ階梯を経ているじゃないか。

A 一応は往生して畢竟じて等しくなると示すが、再往は往生見仏即時に等しくなることを明かす証文として第二十二願が挙げられる。

Q 第二十二願のどの言葉によって証明してるのか

A 超出常倫。

菩薩の十地の階位を順を追って進んでいくのではなく、初地からいきなり八地、十地あるいは等覺の位まで超越することを可能ならしめるのが本願力の妙用である。

自利に安住して利他の精神を忘れ大乘菩薩道を失する難をいう。また身心ともに完全に無に帰する小乗の無余涅槃(灰身滅智)の難でもある

②の2 『論註』三願的証の釈意

Q 三願的証とは何か

A

本願力によって速やかに菩提（仏果）を得る

（不虛作住持功德）

未証淨心の菩薩が階梯を経ずに寂滅平等法身を得る

（三願的証）

即得成就阿耨多羅三藐三菩提の因縁は仏力である

⑮ 往生

⑯ 正定聚

⑰ 一生補処

義相③ 『教行信証』『証文類』の引意

③の1 科段

（『聖典全書』二巻付録29頁）

二章 還相の悲用を明かす【還相廻向釋】

一節 正釈

一項 直明……………二言還相

二項 出拠……………則是出於

二節 引文【引文】

一項 經説は註を指す……………願註論故

二項 広く師釈を引く

一科 略して別に還相廻向あることを示す

一目 還相の義を挙ぐ（『浄土論』）……………浄土論曰

二目 還相の名を出す（『論註』）……………論註曰還

二科 広く還相摂化の徳相を顕す（『論註』）

一目 摂化の徳相を顕す

（一）願の大義を明かす（觀察体相）

（Ⅰ）一生補処を釈す……………又言即見138

（Ⅱ）自在摂化を釈す……………觀菩薩者140

（二）願の由来を示す（浄入願心）

（Ⅰ）願心莊嚴を明かす……………已下是解142

（Ⅱ）広略相入を明かす……………略説入143

二目 摂化の始末を証す

（一）因

（Ⅰ）因体を挙示す（善巧摂化）……………善巧揚化145

（Ⅱ）菩提心の義を示す（障菩提門・順菩提門・名義摂対）

……………障菩提門146

（Ⅲ）因徳を結成す（願事成就）……………願事成就149

（二）果（通じて上因に酬ゆるの果徳を明かす）

(利行満足) …………… 利行満足
三章 総じて往還の義を結ぶ【往還結釋】…………… 爾者大聖 151
尾題…………… 願淨土眞 152

Q 第二十二願はどこに引用されるか
A 2度引用されていると見える。

①願名を挙げた後、還相回向釋を牒して經文を挙げる。

(『聖典全書』二卷137頁) (『註釈版』313頁)

『註論』(論註)に顕れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

②『論註』引文(觀察体相章)(『聖典全書』二卷139頁) (『註釈版』316頁)

Q ①經文としての引用と②釈文としての引用と違いは？

A 同意。繁重をさけて一度目を避けるか。

③の2 正釋

(直明)

利他教化地の益

『略典』(『聖典全書』二卷265頁) (『註釈版』482-483頁)

必至滅度 「利他教化地の果」 証果の体

還相回向 「利他教化地の益」 証果の用

(願名)

Q 「証文類」にある第二十二願の願名如何。

A (『聖典全書』二卷137頁) (『註釈版』313頁)

【14】二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願(第二十二願)より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』(論註)に顕れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

必至補処の願

補処Ⅱ(仏陀の座処を補う)Ⅱ仏陀になること

一生補処の願

仏陀になることが必ず定まっている菩薩の最高位に至らしめる願

今生の一生が終われば

仏陀になることが必ず定まっている菩薩の最高位に即かしめる願

還相回向の願

『論註』の還相は還來穢国の相状がすなわち回向の相

(往相)

淨土願生者が礼拝・讃嘆・作願・觀察の前四念の自利の功德を

他に回向する利他する

(還相)

淨土に往生した菩薩が五功德門の前四門(近大宅屋)の自利行徳を

園林遊戲地して利他する

宗祖の場合

阿弥陀仏が衆生に往相と還相を回向する

還相

從果還因

—— 本国位相

—— 他方摂化（還來穢國）

Q 「亦名」と「亦可名」の違いは何か

A 前二名は願文より名付けた。「還相回向」は宗祖の義名。

Q 他の願名ありや。

A

大慈大悲の願

Q 言葉の出処如何

A

『浄土三経往生文類』（『聖典全書』二卷584頁）（『註釈版』630頁）

大慈大悲の願、『大経』にのたまはく、「設我得仏……

『如来二種廻向文』（『聖典全書』二卷725頁）（『註釈版』723頁）

このころは一生補処の大願にあらわれたり。大慈大悲誓願は『大経』にのたまはく
「設我得仏……

『略典』（『聖典全書』二卷265頁）（『註釈版』483頁）

大慈大悲の弘誓

Q 名義如何

A 「大」の字は仏の勝れた徳をあらわす時に用いる。

『論註』上 性功德（『聖典全書』一卷459頁）（『註釈版』七祖篇61頁最後の字）

慈悲に三縁あり。

一には衆生縁、これ小悲なり。

二には法縁、これ中悲なり。

三には無縁、これ大悲なり。大悲はすなはち出世の善なり。

Q 第二十二願をなぜ「大慈大悲の願」というか

A 仏果より十方に至りて衆生を利益することを誓ってあるから

Q 依りどころ如何。

A 仏の至極の慈悲を「普賢の徳」という

「讚弥陀偈讚」（二七）（『聖典全書』二卷343頁）

安樂无量の大菩薩

一生補處にいたるなり

普賢の徳に歸してこそ

穢國にかならず化するなれ

（左訓）文明本 大慈大悲をまふすなり

国宝真筆本・顕智書写本（表記は違うが同文）

我ら衆生極樂にまいりなば、大慈大悲を發して十方に至りて衆生を利益するなり

仏の至極の慈悲を普賢ともうすなり

▲参考▽一生補処

(WE版新纂浄土宗大辞典)

菩薩の階位における最高位。迷いの生存として今生の一度だけ縛られている者、次の生存では仏になることができる位にある菩薩のこと。⑤ ekajñi prañibaddha⑥ skye ba gcig gis thogs pa 一生所繫しよけとも訳されるほか、略して補処ともいう。玄一の『無量寿経記』上によれば、一生補処の菩薩には穢土の菩薩についていうと住定(相好業を修す)・位定(仏地に近い)・一生補処(一生を終えての後、仏処を補う)・最後生(成仏の身)の四種があるとされ、位次については異説が認められる。『菩薩本業経』下に「これを名づけて補処となす、十より十法を成じてより、現世に紹代無上正真の道を、最正覺をなして天下を度脱す」(正蔵一〇・四五〇下)とあるのは今生において成仏する最後生の菩薩を指し、一方『阿閼仏国経あしゅくぶつこくきょう』上「発意受慧品」に「一仏刹より復た一仏刹に遊び、即ち兜率天に住し、一生補処の法を得」(正蔵一一・七五四下)とするのは兜率天に住した後、次生にて仏処を補う菩薩を指している。『観弥勒菩薩上生兜率天経』には兜率天に上生した弥勒菩薩を補処の菩薩とし当来世に下生して成道するとするが、これは『阿閼仏国経』と同様の説である。『無量寿経』上の第二十二必至補処ひつしふしよ願では「もし我れ仏を得たらんに、他方仏土の諸もろの菩薩衆、我が国に來生せば、究竟して必ず一生補処に至らん」(聖典一・二二七/浄全一・八)とあり、これについて道光は『無量寿経鈔』五において、極樂の菩薩は一地から一地へと階次を経るのではなく、補処の位に超えて至ることが誓われているとする(浄全一四・九七下)。また一仏の浄土にどうして多くの補処がいるのかという問題について、一生とは時分遠近の区別についていうのではないとし、速やかに成仏するという点については、道理としては他方随縁の国土に往つてのことであるとする(同九八下く九下)。したがって道光も次生にて仏処を補つと解している。また『大阿弥陀経』『平等覺経』や『観世音菩薩授記経』等では阿弥陀仏が入滅した後、觀世音菩薩と大勢至菩薩とが相次いで補処することを説き、この二菩薩を補処の菩薩と位置づけている。觀世音菩薩については『四十八卷伝』一三に「そもそも清水寺の靈像は、極樂浄土には、一生補処の薩埵」(聖典六・一四〇)とあり、『翼賛』一三では『群疑論』を引いて位次を「第十地ノ終リ、等覺ノ薩埵」とした上で、一生を「此ノ位仏二近フシテ」と釈し、補処を「ホトケ教化ノ処ヲニギハシ給フヲ補処ト云ナリ」(浄全一六・二二五下)と右と同様に解している。その他『阿弥陀経』には「極樂国土には、衆生生ずる者は、皆これ阿鞞跋致あびばつちなり。その中に多く一生補処あり。その数甚だ多し。これ算数の能く知る所にあらず」(聖典一・三一八/浄全一・五三)として、極樂には一生補処の菩薩が多いうることを説いている。

義相④ 宗祖の還相回向釋の特色

現生で一生補処(因より果に至る)

一生補処Ⅱ弥勒菩薩

弥勒と等し

現生正定聚

往生即成仏して一生補処(果より因に還る)

Q 宗祖の還相の釈相如何。

A 還相が『証文類』に明かされるように、往生即成仏(滅度)するとその証果の悲用として

直ちに従果還因して、因人の相を顕現し衆生を教導する。

願事	『大經』文当面		論註	宗祖
	(一、26)		(一、511~528)	(二、139)
所願	往生した者を一生補処に至らしめること		本願力によって速やかに菩提(仏果)を得る (不虛作住持功德) 未証淨心の菩薩が階梯を経ずに寂滅平等法身を得る (三願的証) 即得成就阿耨多羅三藐三菩提の因縁は仏力である ⑮往生 ⑰正定聚 ⑳一生補処	一生補処・還相回向 本国位相と他方摂化全体が還相
超出常倫	設我得仏 他方仏土 諸菩薩衆 衆生我國 究竟必至 一生補処 除其本願 自在所化 為衆生故 被弘誓鎧 積累德本 度脱一切 遊諸仏國 修菩薩行 供養十方 諸仏如来 開化恒沙 無量衆生 使立無上 正真之道 超出常倫 諸地之行 現前修習 普賢之徳 若不爾者 不取正覺	除 他方摂化 本国位相	除 無上正真之道に立せしめむをば除く 常倫諸地の行を超出し、 現前に普賢の徳を修習せむ	除 他方摂化 本国位相 無上正真之道を立せしめむをば除く 常倫に超出し、 諸地の行現前し、 普賢の徳を修習せむ
	他方摂化をすること	一生補処に至らず	階梯を経ずに菩提を得ること(七地沈空なし)	従因至果の常倫を超出する

順縁の教化（化身土文類）

- Q 阿弥陀仏が群生海を救済する構造如何
- A 往還二廻向
- Q 往相が廻向されることによる利他教化のすがたは？
- A 真実の教行信証。利他教化の果まで。
- Q 還相が廻向されることによる利他教化のすがたは？
- A 利他教化の益。従果還因の菩薩。
- Q 従果還因の菩薩が群生海を利益するすがた如何。
- A 聖道門

「自力利他教化地」（觀經隱顯2.196）

▶煩惱に惑わされ、邪道に迷っている衆生に

煩惱の厭うべきことを知らせ、正見に導かれた正しい生き方を指示し、仏法の真理性を顕示する。

要門

「福德蔵を顕説して群生海を誘引し、阿弥陀如来、本誓願を発してあまねく諸有海を化したまふ。すでにして悲願います。修諸功德の願（第十九願）と名づと名く。」（要門釈2.183）

▶自力修行の破綻を契機に浄土を願わせる

真門

「阿弥陀如来は本と果遂の願「この果遂の願とは二十願なり」を発して、諸有の群生海を悲引したまへり。」（真門釈2.201）

▶諸行から念仏へと行を転換させる

ついで自力心を捨てさせて第十八願の本願力回向の法門に転入させる。

Q 權化方便の法門が還相の菩薩の利他教化であったという文証如何。

A 『末灯鈔』第1通（2.778）

聖道といふは、すでに佛になりたまへるひとの、われらがこゝろをすゝめんがために、佛心宗・眞言宗・法華宗・華嚴宗・三論宗等の大乘至極の教なり。佛心宗といふは、この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗・成實宗・俱舍宗等の權教、小乗等の教なり。これみな聖道門なり。權教といふは、すなはちすでに佛になりたまへる佛・菩薩の、かりにさまざまのかたちをあらはしてすゝめたまふがゆへに權といふなり。

逆縁の教化

- Q 南都北嶺から宗祖はどんな目にあったか
- A 法然聖人一門の破壊。兄弟子が死刑にされた。ご自身も流罪になった。
- Q そんな相手を還相の人と見たのか
- A はい。釈尊のサンガに重ねて見ていたと窺う。
- 『略典』（2.266）

【18】ここをもつて、浄土の縁、熟して、調達（提婆達多）、闍王（阿闍世王）をして逆害を興ぜしめ、濁世の機を憫れんで、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。つらつらかれを思ひ、静かにこれを念ずるに、達多・闍世、博く仁慈を施し、弥陀・釈迦、深く素懷を顕せり。これによりて、論主（天親）は広大無碍の淨信を宣布し、あまねく雑染堪忍の群生を開化す。宗師（曇鸞）は往還大悲の回向を顕示して、ねんごろに他利・利他の深義を弘宣せり。聖権の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、広大の心行、ただ逆悪闍提を引せんと欲してなり。

『本典』総序

しかればすなはち淨邦縁熟して、調達（提婆達多）、闍世（阿闍世）をして逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなはち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、まさしく逆謗闍提を恵まんと欲す。

「觀經讚」78・79首

(78) 弥陀・釈迦方便して 阿難・目連・富楼那・韋提

達多・闍王・頻婆娑羅 耆婆・月光・行雨等

(79) 大聖おのおのもろともに 凡愚底下のつみひとを

逆悪もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり

Q 調達（提婆達多）、闍王（阿闍世王）の逆害とは？

A 提婆達多是教団の秩序を乱し（破和合僧）釈尊を殺そうとした（殺阿羅漢・出仏身血）、阿闍世王は（殺父殺母）

Q そんな奴がどうして権化の仁と味わえるのか。答者は安居というサンガを破壊しようとして、父を殺すような相手を仰ぐことができるか

A 死ぬまで許さない

Q ご開山はできたのか

A 逆縁の中で許せない人を「つらつらかれを思ひ、静かにこれを念ずるに」と思慮なさっている。

Q どう受け止めたのか

A 「いかりはらだちそねみねたむころ」が「臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」という私のすがたを教えて下った方だと受け止めたと窺う。『一多文意』2.679

Q 権化の仁が出現した目的は？

A 「聖権の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、広大の心行、ただ逆悪闍提を引せんと欲してなり。」

※間違いやご指摘、お気づきの点がございましたら教えて下さい。山上正尊

〒599・8125 大阪府堺市東区西野521 旭照寺

senjakuhoengan@gmail.com